

こしえるびと

つむぐストーリー vol.118

高い志のもと、日々“キラリ”と光る活動をしている人たちがいる。
“黄金の郷”いわて平泉を支える、魅力溢れる“こしえるびと”の
メッセージをシリーズで紹介していく。

グリーンヘルパーが導いた道筋

水田地帯に立ち並ぶビニールハウス内。秋になっても陰りを見せない強い日差しを受けながら、浅利益実さんはトマトの生育状況を一本一本観察しながら管理作業を行う。

高校を卒業するまで盛岡で育ち、大卒卒業後は販売員の職を選んだ。結婚を機に夫の真さんの出身地である平泉町に移り住んだ後も、子育てをしながら農業とは無関係のパートや臨時職員をしていた。ところが、グリーンヘルパーの募集を目にし、気になっていた時に、知り合いのトマト農家から声を掛けられ、トマトの管理などを手伝うことになった。手伝いを3年ほど続けた益実さんは、平泉水稲育苗センターの育苗後のハウスを借りられることを知る。「借りられるなら自分でトマトを栽培してみたい」。2022年に就

農し、トマト栽培の道を歩み始めた。

トマトが育つ仕組みを理解することが楽しい

グリーンヘルパーの時は、苗を植えて管理すれば実がなると思っていた。実際に栽培を始めて、肥培管理や水やり、栄養の送られ方などのバランスが大事だと知った。管理技術を勉強し、トマトが育つ仕組みを理解することに楽しさを感じている。その中で見いだした目標は「元気な生長点を維持すること」。それが、安定した収穫につながる。水稻の育苗終了後に定植するためスタートが遅くなる分、「10月いっぱいはっきり収穫したい」と話し、JAトマト部会で推奨する秋どり栽培にも取り組む。現在までの出来を振り返り、「去年と同じ失敗をしてしまったが、必ず理由があるはず」と来年に向けて修

正点を探っている。

農作業仲間を増やしたい

益実さんは3人のグリーンヘルパーに手伝ってもらっている。ヘルパーさんには作業を楽しんでもらいたいと願う。「農作業の楽しさを共有し一緒に汗を流してくれる仲間を増やしていきたい」。平泉水稲育苗センターのハウスは現在5組の生産者が利用している。「就農できたのは育苗センターのハウスを借りることができたから」と話す益実さん。ハウスを建てるのはハードルが高いが、このような施設が使えれば、就農の間口は広がる。隣のハウスで頑張っている生産者の存在も、前向きに栽培に取り組むモチベーションにつながる。仲間と一緒に、農作業を楽しむ仲間がもっと増えることを夢見て、益実さんの挑戦は始まったばかりだ。

農作業の楽しさを分かち合える仲間をつくりたい

平泉町平泉

浅利益実さん



PROFILE

浅利 益実さん (46)

Masumi Asari

平泉町平泉

1977年生まれ。幼少期から高校まで盛岡で過ごす。結婚を機に夫の出身地である平泉町に移住。グリーンヘルパーとして働くうちにトマト栽培に興味を持ち就農。トマト9割。夫、子と3人暮らし。

